

## Joseph Conrad : Il Conde

——短編小説の技巧——

神 崎 浩

物語は narrator の語り口で始まる。Count との出会いは、Naples の国立博物館であった。大変に上品な人で、年齢は60才を少し出たぐらい、美術品の鑑賞眼もある。服の趣味もよい。健康を求めて Naples に来ている。私が重態になった友人の見舞に Taormina に10日間行って帰って見ると、伯爵は私が見舞に発った晩、国立公園へ音楽を聴きに行き、そこで、若い貴族的な強盗にナイフでおどかされて、金をうばわれたのだった。ところが、突然、不慮の時に備えて3年も前から20フランのコインを持っていたことを思い出して、Café で気持を静めるためにシチュー料理を食べる。

その時、先ほどの強盗をした若者が、そこにいることに気がつく。Café でタバコ売りをしている Pasquale に、その若者が何者かたづねると、「良家の若い Cavaliere です」と言う。その若者も伯爵に気がつき、そばに来て悪態をつき、立ち去って行く。

伯爵は自分が所属している、そして、一番信頼している、上流社会の若者からののしられたことに大変ショックを受けて、南イタリアを去ろうと決心する。彼の品位ということに対する考え方そのものが、ただ一度の下劣な体験で汚されてしまったのだ。その決意は、日本のサムライのハラキリの覚悟よりも固いものだった。伯爵にとっては、帰国ということは、自殺にも等しいことだと narrator は言う。

“Vedi Napoli e poi mori” の諺通りに伯爵は Naples をくまなく、その裏側の見なくてもよい所まで見て、この土地を去っては永くは生きられ

ないことを承知の上で Naples を去って行った。

Josep Conrad の *Il Conde* は1906年に書かれ、1908年の *A Set of Six* という短篇集の中に6番目の短篇として入っている。

この *Il Conde* は、Conrad の他の作品に多く見られる、物語の進行係をつとめる「語り手」によって語られる形式を用いている。この「語り手」を用いるという technique に Conrad は相当工夫を凝らしているのである。

彼より以前の作品では、全知的立場に立って筆者が第三者として、三人称的に描く作品が普通だった。ところが、彼はある事件を目撃した者、あるいはその事件を伝え聞いた者を、「語り手」として設定して、ストーリーの主題を、語り手と、読者の間の距離を意識的に調整することで、いろいろと技巧を用いるのである。

*Il Conde* においては、まず「私」なる人物が登場して、ストーリーの中心ともなる事件の直接の体験者である「伯爵」と知り合うことになった経過を語り、次いで、その「私」が聞き手となって、体験者の伯爵が「語り手」にまわり、事件を直接に語りだし、最後にまた「私」が「語り手」になって、その語の批評を加えるという技巧を用いている。

この narration の工夫に伴う効果は一体どのようなものであろうか。

それは、まず第一に、これはよく言われることであるが、現場に居合わせた人物、または、その人物自身に話を聞いた人によって語られた話であれば、読者に対して説得力があり、信頼感を与える力があるということである。だがこれは、多くの作品を読んで訓練されている現代の読者にとっては、全知的作者が語ろうが、または、視点の限られた特定の「語り手」が語ろうが、現実感を増す効果があるとは思えない。

第二に考えられることは、物語の時間の流れの調整、主題から逸脱して事件や人物に対して加えられる批判あるいは註釈が自由にできることであ

る。さらに、そこから生じる哀感や irony の効果もある。全知的作者が語る場合には、註釈の度が過ぎると小説の雰囲気や霧を壊してしまうことが起りやすい。だが、「語り手」によって語られることが、読者の理解を助けるためのものであるという限界を守りさえすれば、霧を盛り上げるのに大いに役立つことになる。

例えば、*Il Conde* における「私」が事件を伯爵から聞いたのは、読者に「私」が語って聞かせている時より、何年か、あるいは何十年か以前のことなのである。だから、当然、事件の結末は知りつくしていることになる。したがって事件がどうなったかということよりも、どうしてそうなったかということに関心が向けられることにもなるし、故意に時間を逆行させたり、進行させたりして、その時の事件その他に対して「私」の立場から批評を加えることも可能になる。また、当然、事件及び事件の体験者に対して、ある距離を置いて、同情や反撥などの註釈を加えることができることになる。即ち、伯爵が事件によって受けたショックは、伯爵自身の受け取り方であって、「私」はその時は「聞き手」なのだから「私」の受け取り方ではない。「私」には「私」なりの伯爵に対する意見もあるし、読者には読者なりの同情なり批判も生じて来るのである。だから、距離あるいは観察の次元ということから考えてみると、まず一番下に事件そのものがあり、その上に事件の体験者がいて、さらにその上に「語り手」の「私」がいて、一番上に読者がいる、ということになるのである。

第三の効果は、語られる事件から自分自身が受けた感覚を、そのまま「私」が述べることによって、事件に深みを与えることができるということである。

伯爵が「私」に事件の事を話し終えた時、「私」は「皮肉はいっさい抜きにして、同情していることを彼に見抜かれないようにするのは大変困難なことだった」(P.69)と述べている。「語り手」によってこの心の振動を伝えられると、読者にもこの問題が他人事ではなくなって来るのである。

第四の効果としては、思い切った省略が可能になることである。この省略こそ短篇小説には不可欠のものなのである。

「私」が友人の病気を見舞に Taormina へ行ってしまい、その晩に伯爵は強盗に襲われるのだが、「私」が伯爵と再会するまでの10日間のことは語られていない。それは語ろうにも語るべき材料が「私」にはないのである。そのために、かえって、事件そのものだけに焦点が合わされて、それを取り巻く部分は読者の側にまかせてしまうことが、きわめて自然に行なわれるという効果を生ずることになる。

*Il Conde* の構成は、すでに述べたように、まず「私」なる人物が伯爵との出会いから始めて伯爵の人格を語り、それを伏線として、次いで伯爵自身の口から事件の様子を語り、その時は「私」は聞き手にまわっていて、その時の伯爵のショックの大きさを客観的に見られる立場を取る。そして、最後に「私」が再び「語り手」として意見を言うという形式を取っている。

「私」が伯爵について知っていることは、「ホテルの使用人たちには彼は *Il Conde* であった」(P.42) だけで、それ以外には名前も知らない。「あのホテルに滞在中の伯爵はあの人だけだったのかも知れないし、あるいはホテルのきまりを厳守する人だということで、尊敬をこめて伯爵と呼んだのかも知れない」(P.42) と考えて見る。博物館で知り合ってから、注意して見ると、服装も仕立てが良く、いつもキチンとしている。「きっと彼の生活すべてがきちんとしたしきたりを守った生活で、大きな出来事に乱されることもなかったのだろう。広い額からうしろに撫でつけた白髪が、理想主義者、想像力豊かな人という風貌をそなえていた」(P.43)

伯爵がこの Naples に来たのは健康のためで、この土地以外では悪質な *rheumatic* に苦しめられるのであった。「彼はおそらく重大な任務についてたことなど一度もなかっただろう。とにかく、彼の生活は快適なもので、

喜びも悲しみも自然の進行—結婚，誕生，死—によって想定され，上流社会で認められた慣わしによって支配され，国家の保護を受けていた」(P. 45)

その上彼は財産家でもあり，「彼の性格は温和で争いには不向きであった」(P. 46)

このように「私」は伯爵の人柄，性格を主観をまじえて語る。この人物描写は，その後の事件が伯爵に与えた影響の重大さを強く印象づけるためになされたものであることは容易に判断できる。

伯爵は10日ぶりに会った「私」に，「実を言うと私は大変な—大変な—何んと言いましょ—いまわしい事件が起ったのです」(P. 49) と言い，「実に重大なことです。重大なことです。もし差しつかえなければ，夕食後に話します」(P. 50) と言う。大変な事件に会いながら，「もし差しつかえなければ」という言葉の方が先に出るような，繊細な神経の持ち主なので，強盗に襲われても，「あの若者はすぐにナイフを投げ捨てて，この私が襲ったのだというふうに見せかけたかも知れない」(P. 58) と思って，助けを求めて呼ぶのを止めてしまうのである。「ただ単に死ぬということだけでなく，それ以上にスキャンダルからは身を引いていなければならぬという気持が彼の性格の底にあったのだ」(P. 59) と「語り手」は言っている。

この強盗に襲われる場面で，その背後に流れるオーケストラの演奏が，伯爵の心の動揺を伝えるために象徴的に用いられる。

「クラリネットが独奏を終ろうとしていました。私は全ての音が聴えた—とハッキリ言えます。それから楽団が最強音を合奏すると，あの男は，眼をむいて，歯ぎしりしながら，実に残酷そうな声で“静かにしろ！ 声を立てると—”と言いました」(P. 57)

「伯爵は，あの若者が光る眼をむいて，白い歯をきしらせた時の，いまわしい野蛮な様子をくわしく話した。その時，楽団はテンポのゆるかな楽

章を演奏中で、トロンボーン的全合奏がおごそかに鳴り響き、大太鼓が慎重に連打を続けていた」(P.59)

伯爵は若者にナイフを突きつけられたまま金を出すように命ぜられるが、「その間、ずっとオーボエの感動的な低音の伴奏に乗って、フルートとクラリネットが甘美なトレモロを演奏していた」(P.60) 金と時計を盗られ、さらに指輪も盗られそうになる。それだけはやれないと拒絶して、「みぞおちのところに殺意をこめて押しつけられている刃渡りの長い、鋭いナイフで腹をえぐられるものと覚悟をきめていた……楽団からはハーモニーの大きなうねりが流れていた」(P.62)

若者がナイフをしまって立ち去ると、伯爵は公園のベンチへやっとたどりついて、「彼は反動のショックで、ハアハアとあえぎながら、崩れるように腰を下ろした」その時、「楽団は複雑なフィナーレを実にはなやかに演奏していた。その演奏は大音響で終りを告げた」(P.62)

静かなクラリネットの音から *fortissimo* の音に移った時、強盗におどされ、金をうばわれた時にはフルートとクラリネットが甘い調べを演奏し、殺されるのではないかと覚悟をきめた時は、楽団は伯爵の心臓の鼓動にも似た *harmony* の大きなうねりのような音を立て、華やかな大音響と共に、強盗事件は終る。

この楽団の演奏風景は明らかに伯爵の心理描写を目的として描かれてはいるのだが、さらに考えを押し進めるなら、事件に出会った伯爵と同じ時点に居合せながら、それとはまったく異った次元で国立公園の夜の演奏会を楽しんでいる人々がいるという、二次元的効果を出すために音楽が用いられていることに気づく。

伯爵自身、「すばらしい音楽を聴き、最上の社交界 (*The best society*) を見て楽しむつもりだった」(P.47) のだ。事実、そこに集っている人々は「皆、上流社交界 (*good society*) の人々ばかりであった」(P.53) その上流社交界に混って自分も演奏を楽しもうとしていたのに、「上流社会

に属している者のような」(P.58) 若者にナイフを突きつけられ、金を盗られてしまう。伯爵が所属し、一番信頼し、これ以外には身を寄せる場所もないと思っていた上流社会から孤立した伯爵の姿を、この音楽は描き出しているのである。

そして、フィナーレの大音響は、伯爵が立っている上流社会という土台のくづれ落ちる音でもあったのだ。

しかし、伯爵はそのことにまったく気づいてはいない。ポケットに、三年も前からまさかの時の用心のために入れて置いた20フラン貨幣を思い出し、Café Umberto 食事をするために行く。この Café Umberto も、上流社会の人々の集る場所である。ところが驚いたことに、その店に先刻強盗をはたらいた若者がいることに気がつく。伯爵は、店で煙草や、絵葉書、マッチなどを売っている男の Pasquale に、あの若者は誰かとたずねる。「あれは Bari から来た良家の若旦那 (Cavaliere) です。彼はここの大学で勉強をしていて、若い人たちの集りのチーフなのです」(P.67) 若者は金を払って伯爵のそばに近づき、「ほう！ お前は金を持っていたな—このうそつき—老いぼれの狸じじい—くそじじい奴！ お前は俺と縁が切れたわけではないぞ」(P.68) と悪態をつく。ここで伯爵は Naples を去る決意をする。彼は上流社会の品位が汚されたことに堪えられなかったからである。

伯爵が Naples に来たのは rheumatism の苦痛から逃れるためであった。「私のような年になると、体の苦痛を免れるということがとても大切なのです」(P.46~47) だがそれだけではない。伯爵は古代のローマ貴族たちが「生活の術にたけていて、この海岸金方の Baia や Vico や Capri に別荘を作った。彼等は健康を求めてこの海岸に移住し、余暇を楽しむために道化師やフルート奏者なども沢山連れて来た」(P.43~45) と信じていた。彼は古代ローマ貴族の仲間入りをするつもりで Naples に来たのだ。そこで最上の上流社交界の人々と一緒に音楽を楽しみ、上等な食堂で

食事をすることが彼の生きが이었다のだ。その上流社会に属する若者から侮辱を受けたということは、伯爵から生きがいを奪うことになるのである。

「語り手」は伯爵の態度を次のように要約する。「“ナポリを見てから死ぬ” 極めてうぬぼれの強い諺であるが、極端なものはすべて、あの哀れな伯爵の節度という立派な精神には、実にいやらしいものだった。だが、私が伯爵を駅で見送った時、彼の振舞はこの諺のうぬぼれの気持に対して、ことのほか忠実だったと考えた。彼はナポリを見た。彼はすみからすみまで見たのだった。そして今や、墓場へ帰ろうとしているのだ」(P.70)

この *Il Conde* は短篇小説の一つの典型であると言っても過言ではないだろう。筋立てを、静—動—静と展開させる構成の仕方、「語り手」の話の進行により伯爵の性格、人格、さらには過去の生活ぶりを読者に知らせ、それでいて饒舌に過ぎず、その事が次の事件の伏線となるという細心の計算、ナポリという外国の観光金を舞台に用いて適度に盛り上げられる異国情緒、“Vedi Napoli e poi mori” という諺の巧みな使い方、等々、短篇小説の書き方を学ぶ人々にはぜひ一読を進言したくなる作品である。

#### Text

Joseph Conrad : *An Anarchist and Il Conde*. The Hokuseido Press, 1969.

#### 参考書

Graver, Lawrence : *Conrad's Short Fiction*. University of California Press, 1969.